

乳・幼年期における音楽教育(3)

——表現の誘導における視覚的側面—— 井上 徳雄
(九州女子短期大学)

1. 研究目的

「乳・幼年期」(乳児から小学校1~2年まで)における音楽性の発達に「視覚」がどのようにかわるか、その考え方、扱い方、問題点などをさぐる。

2. 研究目的設定の基盤

(1) 乳・幼児が、「歌う」「ならす」「動く」などの音楽的な表現活動の過程には、母親や保育者などから、その心身の発達段階に応じた刺激が与えられる。それを模倣し、反復していくうちに、それぞれに個性的な表現を身につけていく。その刺激には聴覚的な(歌声や楽器の音を聞いたりする)活動、触覚(楽器などに触れたりすること)や、運動感覚的な(首を振ったり、手をたたいたりする)活動、そして、今回、問題にしようとする視覚的な(母親や保育者の表情や身振りを見るなどの)反応が考えられる。しかも、この視覚的反応には、歌曲の歌詞内容等のもつ情景やイメージが、子供の具体的な生活経験や想像等と結合して、表現を豊かにするばかりでなく、抽象的な符号や記号等の認識をとおして、理論的な活動へ連動していく必然性も見られる。次に、やや具体的に考察してみる。

(2) 歌唱の表現には、直接、子供たちへ刺激を与える母親や保育者、教師等の歌声や伴奏などの聴覚的な要素と共に、まなざしや口元の動きなど顔面の表情、指先や腕の動きなどを見せることが、運動感覚的な条件などと共に必要になってくる。この視覚的な刺激は、母親や教師たちの指示や励ましの言葉、他の幼児たちの言動などと関連しながら、次第に、その歌曲の表現に生かされていく。

(3) 次に、その歌曲に関係する絵画、写真、参考品などが、いわゆる教材・教具が視覚的環境として準備されることで、その歌曲のイメージを増幅していく場合がある。例えば「ふうせん」の歌唱で、「ふうせん」の絵を見たり、実物をふくらませたり、飛ばしたりしながら、その歌への印象を深めたりする。その外、幼児向けのテレビ番組の映像を見ながら、歌ったり動いたりすることも、日常、多く行われている。

(4) このような具象的な受容は、次第に、図形や文字、絵譜、楽譜などへ抽象化されていく。小学校に入れば、一様に音楽教科書が使用され、それには、歌曲に

応じて、さし絵や写真、文字譜が配列されている。学年が進むにしたがって、音符、休符、その他の記号の種類も増し、本格的な視唱へ移行する。「幼・保」の段階でも、程度の差はあるが、このような視覚的な扱いがなされることも多い。

(5) 特に、五線上の読譜には、歌詞唱、階名唱(移動ド)に、簡単な階名奏、音符や休符の呼び方、打ち方などが加えられ、次第に抽象的な、知的、技術的な活動へ移行する傾向をもっている。

(6) 他方、幼児期から、音楽教室に通ったり、ピアノ、オルガン等の個人レッスンを受けたりする傾向は、家庭への楽器の普及などと相まって、次第に増加している。「幼・保」でも行事の中に、器楽合奏や楽器を使ったパレードなどが行われることもあり、このような時、リズム記号や楽譜等が多用されている。

(7) 以上、乳・幼年期の音楽表現には、この「視覚的な要素」が重要な役割をもっているが、特に、前述の(4)~(6)のように、楽譜に直結する扱いは、ともすると、理論的、機械的に陥りかねない。この期の音楽教育の推進の上に、これらの検討や実践が、一つの課題となって来る。

3. 研究計画と方法

(1) 幼稚園や保育所(園)の歌唱、器楽、動きのリズムなどの指導で、視覚的配慮がどのようになされているか、その問題点等について実践的に分析する。

(2) 主として、小学校1・2学年の音楽教科書の編集傾向と「幼・保」での視覚的扱いについての関連や問題点などを実践をとおして検討する。

(3) 民間の音楽教室での楽譜、ノート等の内容や系統、その指導の成果や問題点等をさぐる。

(4) 視覚障害をもつ幼児等の、歌唱や器楽等の習得過程と、健常児との関連について観察、集約する。

(5) 教師指向の学生を対象に、幼児からの学習歴等を調査し、この面での成果や問題点等について調査する。

(6) 以上、「乳・幼年期」の音楽表現の各分野で「視覚的な要素」の果たす役割や問題点を、歌唱や器楽、小学校での音楽教科書等をとおして、現実的に究明していくことを意図した。

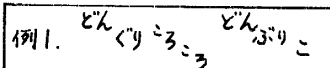
次に、その一端を述べる。

4. 研究経過と考察

(1) 歌唱指導の場面で-----

ア 「歌うこと」の指導では、保育者の範唱や範奏を聞きながら歌う「模唱」が中心で、保育者の表情や身振り、友達の様子を見たりして、そのふん囲気の中で歌を覚えていく。その過程で、保育者が、黒板などに歌詞を、ひらがなで縦書きや横書きにして、それを、指差したり、印をつけたりしながら歌わせている。この中では、読みの能力や理解の程度が問題になる。

イ 旋律を、音の上下や長短に合わせて、ひらがなの歌詞を配列する。(例1)

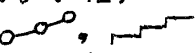
例1. 

又、その歌曲の

題材になっているもの(花、動物、乗りもの等)を、

黒板、掛図、マジック(磁石) 

板などで提示する。(例2)

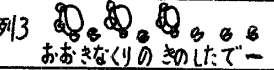
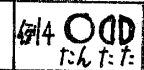
ウ 旋律線を  などの線や形で表現し、これを目で追いながら、指や腕などの動きを入れて歌っていく。

(2) 器楽指導(打楽器や鍵盤ハーモニカ使用等)で---

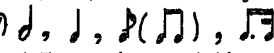
ア カスタネット、鈴、タンブリンのような無音程打楽器を中心に、歌唱曲や簡単なマーチなど器楽曲に合わせて演奏することが普通行われている。楽器は、音色感やリズム感などの基礎的な感覚を育成するのに有効である。最近、幼児対象の楽器が、種々開発されて、園によっては、有音程打楽器(木琴・鉄琴等)や、鍵盤をもつ楽器なども、多く使われている。

これらの楽器では、必然的に音の位置関係の識別が要請され、鍵盤に、歌に合わせてドレミの印をつけたりして、演奏をしやすいよう工夫している。

イ 打楽器には、その打つ位置や、他の楽器との関係

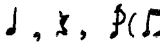
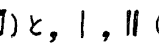
などを図示した  例3  例4

符の歴時関係を符号化したりしている。(例4)

ウ 音符、休符の  などを使って、簡単なリズムパターンを作り、カードなどに書いて「ターア、タン、タタ、タッカ」などと反射的に称えさせる。又、これに「動き」を加えて、「リズム遊び」とし、独立して取り上げるケースもある。

エ 民間の、幼児を対象とした音楽教室等では、独自の計画で、五線、加線、階名、音符、休符等の名称や書き方、鍵盤との関係など、いろいろの方法で教材化され、それが多くの場合、専門の教師によって、指導されている。

(3) 小学校1・2学年の音楽教科書と指導内容----

幼児は、小学校入学とともに、音楽教科書を手にする。親しみやすいイラストや色彩、歌詞の配列など、細心の配慮がしてある。ただ、音符、休符等は、2学年になって初めて、 と、 (縦線、横線)が提示されている。1週2時限、1時限45分間の授業時間の中に、「幼・保」期に、比較的多用された音楽活動が、連結されていく。

(4) 将来、幼・小の教師指向である本学2年の学生の142名中60名(42%)が、「幼・保」期に、ピアノやオルガンを中心とする音楽教室や個人レッスンを受けた経験をもっている。(1987年1月調査)これに、「幼・保」での楽譜に関する経験を加えれば、相当の成果はあるはずである。しかし、その後の歩み等によって、現在では、相当の差異が見られる。

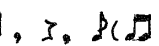
5. 総括と課題

(1) 当然のことながら、乳・幼年期の音楽的表現には、聴覚や運動感覚、触覚とともに「視覚」が重要な役割をもっている。ただ、前項(4.研究経過と考察)

(1)のイ、ウで述べた「かな譜」「絵譜」から、(2)のア、イ、ウ、エで述べた「階名読み」「リズム読み」などへ進み、更に、本格的な楽譜へと高度化していく。

(2) 特に、楽器の指導では、例3で示したように、音配列を、それらの楽器を形象化して、その視覚的リズムに合わせて演奏できる利便さもあり、4〜6歳児にも、ある程度、受け入れられる。

(3) ただ、オルガンや鍵盤ハーモニカのように、音配列が視覚的に確認できるものは、鍵盤に階名など書いたシールを貼って演奏させることなどが多い。そこには、必然的に階名唱が行われることになるが、前々項(1)で述べた、高度な視唱、視奏にならない配慮が必要になる。

(4) 小学校では、2学年で初めて が記号として指導されることは前に述べたが、五線や加線が教科書で指導されるのは3学年からである。小学校では、音楽への愛好心を育てることを重視し、聴唱法での歌詞唱や、階名模唱、階名暗唱を多く経験させようとしている。

(5) 公教育としての「幼・保」と「小」が、音楽表現の分野でも密接な連繋を考慮する必要がある。特に、「自己表現」の楽しさを求める音楽教育では、演奏技能や楽典的な理解等が、その楽しみの追求と遊離しない配慮が大切になって来る。個人的な音楽的才能を伸ばす教育、視覚障害児の表現指導等、残された問題は多いが、今後、又、ささやかな歩みを続けたい。